

研究ノート

経営学の根底思想の探求

——近代ヨーロッパ思想に見る人間の自律意識——

高 岡 義 幸*

目 次

ま え が き

1. ヨーロッパ思想に登場する「哲学」と「理性」の意味およびその機能
 - 1.1 「哲学」の意味
 - 1.2 「理性」の意味と機能
 2. ヨーロッパにおける思想形成の階層構造と理性主義
 - 2.1 第一層：実体論
 - 2.2 第二層：古代ギリシャ思想、特にプラトンの思想
 - 2.3 第三層：キリスト教とその人格神
 - 2.4 第四層：理性主義の誕生と変遷
 3. 理性主義の変遷と発展（神的理性からの脱却／人間理性の自律性向上）
 - 3.1 啓蒙主義運動
 - 3.2 イギリス経験主義
 - 3.3 カントの試み
 - 3.4 ヘーゲルの試み
 4. ニーチェ思想の性格と彼の企て
 - 4.1 19世紀末ヨーロッパ社会の諸相とニーチェの危機感
 - 4.2 ニーチェの企て
 - 4.3 「生きた自然」概念の復権：反哲学
 - 4.4 新たな価値定立の原理
 - 4.5 人間の自律性向上から見たニーチェ思想の意義
 5. ハイデガー思想の性格と彼の企て
 - 5.1 思想形成と研究分野の変遷
 - 5.2 「存在と時間」に込められた意図
 - 5.3 反哲学と反ヒューマニズム
 6. 総括：人間の自律性の高まりとそれに対する反省
- あ と が き

ま え が き

日本において「経営学の研究」と言われる場合、欧米の諸学説、中でも特に米国で唱えられた学説を紹介することが大きな割合を占めているようだ。そして米国発の学説や経営制度を規範的・先進的モデルとして日本の経営を作り替えることが経営の進歩であるとの価値観が根強くあることは否めまい。そこには米国発の学説や制度には普遍的有効性があるとの暗黙の評価が存在するのであろう。筆者はこのような評価に疑問を抱かざるを得ない。なぜなら各国・各地域には、それぞれ特徴的な文明史的差異があり、この差異が経営学説や経営実践に少なからぬ作用を及ぼしていると考えからだ¹⁾。

経営学は19世紀終盤から20世紀初頭に米国で誕生したと言われており、その後も米国内で着実な発展を遂げてきた。それゆえに米国発の学説や制度の有効性をより正確に知るためには米国の文明史的特徴を捉えておく必要がある。しかしこれを行うためには、さらにそのルーツとも言うべきヨーロッパの近代思想をまず捉えることから始める必要がある。ただ、ヨーロッパの近代思想と言えばそれは広範囲に亘る膨大なものである。本研究はその全体の変遷を思想史として論じようとするものではない。目的はあくまでも経営学の根底思想となっているであろう存在観や価値観を探り出すことである。そのためには思想史の中から「人間の自律意識の向上」を捉えることが重要である。なぜなら経

* 広島経済大学経済学部教授

営学においては「人間の意識性・意識的営み」がキーワードとなるからである。

本稿ではヨーロッパ近・現代思想の中でも哲学分野の変遷を包括的にしかも深く捉えている木田元の「反哲学入門」（新潮社、平成24年）の内容を主たる考察対象とし、その他のいくつかの研究でこれを補っている。上記の木田の著作では、文芸評論家の三浦雅士によれば、「西洋の思想の歴史、とりわけその根幹であるいわゆる哲学の歴史が驚づかみにされている」。筆者も、この著作は日本における「哲学」観の迷いを解き、ヨーロッパにおける哲学の特徴と変遷を体系的にかつ明快に論じたものと考ええる。考察対象をタイムスパンで言えば、18世紀の啓蒙主義から20世紀のハイデッガーまでである。ちなみにここに言う自律意識とは人間相互の社会的関係に見られるそれではない。これよりはるかに根本的で壮大な、神に対する人間の自律意識とも言うべきものである。

なお、本稿では木田元の上記の著作を参照することが多いので、これからの引用箇所を表示は、簡略化して本文中にページ数を表記するに止める。この著書以外のものを参考にした場合には、本稿の末尾に通常の注記で表示する。

1. ヨーロッパ思想に登場する「哲学」と「理性」の意味およびその機能

1.1 「哲学」の意味

哲学という語は日本の日常においてもしばしば用いられる。ただ日本でこの語に込められる意味は漠然としており、しかも各人各様の使い方がなされている。しかし「哲学」の原語である philosophy は「西洋」という文化圏に特有のもので、「ありとしあらゆるもの（存在するものの全体）が何か」を問う思考様式である。しかもその際、人間が感覚的に捉えることができない何らかの超自然的原理を設定し、これが根源要因となってあらゆるものは存在している

と説明する論法が用いられる（木田、22-26）。設定される超自然的原理の名称は時代の推移に応じて次のように変化してきた（木田、43-44）。かっこ内は提唱者の名称で、その右は存在するもの、すなわち現象の説明である。

- a) アイデア（プラトン）→アイデアの模像、似姿
- b) 純粹形相（アリストテレス）→純粹形相を目指して運動しつつあるもの
- c) 神（キリスト教神学）→神の創造したもののキリスト教的人格神（アウグスティヌス）
実体形相（トマス・アクィナス）
- d) 理性→理性によって認識されるもの
神的理性（デカルト）
人間理性（カント）
精神（ヘーゲル）

したがって philosophy の訳語である「哲学」は元来はヨーロッパに固有の存在論とも言うべきもので、日本にはない。念のために付言するが、日本に「哲学」がないというのは卑下ではない。あらゆるものの存在を問う営みは東洋にも日本にも、これに劣らぬものがある（木田、22）。ちなみにハイデッガーも自分の思索の営みを「哲学」とは呼ばず、「存在の回想」（Andenken an das Sein）と呼んだりしている（木田、287）。この「哲学」を論じる際に「形而上学」という、研究者以外にはなかなか理解しがたい語がほぼ同じ意味で用いられることもあるため、日本での「哲学」理解をいっそう困難にしている。

1.2 「理性」の意味と機能

ヨーロッパの思想を理解するためにも、本研究の目的を達成するためにも、そのキーワードの一つとなるのが「理性」（ラテン語の ratio）であろう。字面だけを見ればこの語は日本でも日常的に用いられているが、ヨーロッパ思想に登場する「理性」はそれとは全く別物である。われわれ日本人が言う理性は人間の自然的な能力

の一部であるため生成消滅するし、その機能も有限である。しかしヨーロッパ思想に登場する「理性」は人間に生得的に備わっている観念・機能であり、しかもそれが創造主である神によって注入されたものとして位置づけられる。そのためそれは消滅はせず、無限の力を有している。このような「理性」を超自然的原理として全存在を論ずる主張は理性主義と呼ばれる。

理性主義は17世紀前半に誕生し、その後ヨーロッパ思想の中核概念の一つとなる。理性主義の創始者とも言うべきデカルトの主張に基づいてその基本的特徴をもう少し確認しておこう。「理性」は三つに分類できる。一つは世界創造の設計図になった神の理性、つまり大文字の Ratio、第二はその設計図に従って世界に仕込まれた摂理、つまり理性的法則としての ratio、第三が神によって神の理性の似姿として人間に植え付けられた人間の ratio である。神的理性を論ずるのが神学、世界の理性的法則を論ずるのが科学、人間に備わった理性とその機能を論ずるのが哲学である。この三つの理性の織りなす秩序を重視する哲学が理性主義、合理主義である。初期の「理性」は後のものとの対比で「古典的理性」とも呼ばれる（木田、168-169）。

このように、「理性」は元来は神の能力である。デカルトは人間にも理性が備わっていると主張したが、その人間理性も神の神的理性の出張所のようなもので、神による世界創造の設計図の一部と言い換えることもできる。したがってそれは全ての存在を明確に捉えることができる機能を持ち、普遍的で客観的妥当性をもつ認識能力となる（木田、44-46）。デカルトの古典的理性にはこのような性格が最も色濃く現れているが、18世紀から19世紀にかけてヨーロッパにおいては神的理性への依存から脱して人間の自立を実現しようとする営みが次々と展開される。次章ではこれを、もう少し踏み込んで体系的に整理してみよう。

2. ヨーロッパにおける思想形成の階層構造と理性主義

2.1 第一層：実体論

ヨーロッパ思想の形成要因を捉える際、下記のような階層構造として捉えたと理解しやすい。ヨーロッパにおいて、全存在が何であるかが探求される際に、言い換えると自然概念が形成される際に最も基礎となっているのが実体論といわれる考え方であろう²⁾。

これは存在を認識する際に、その最も根源的なものを指定し、万物はそれによって形成され規定されているとする考え方である。この根源的なものは英語では substance という語で示される概念で、「下にあるもの」、「下で支えるもの」という意味であり、日本ではこれが「実体」あるいは「基体」と訳される。このような実体論的発想が最も根底にある第一層である。

2.2 第二層：古代ギリシャ哲学、特にプラトンの思想

ヨーロッパ思想の形成要因を探究すると古代ギリシャ哲学に遡らざるを得ない。古代ギリシャには元来、自然を「おのずから生成し、変化し、消滅していくもの」とみる自然観があった。しかしプラトンはこれを否定して、イデアという概念を指定し、自然はこれを目指して「制作されるもの」という存在観を打ち出した。そこでは自然は「制作」の単なる「材料」（ラテン語ではマテリア）にすぎなくなる。この「おのずから成るもの」という自然観と「作られてあるもの」という自然観の対立、論者の名前ではいえば、ソクラテス以前の思想家達の自然観とプラトン主義の対立がヨーロッパ思想の変遷の根底にはあるようだ。しかし圧倒的に強い影響を及ぼしてきたのはプラトン思想である。これが第二層である（木田、88-95、112）。

後に西洋思想の方向性を決定することになる

プラトンの「イデア」について少し解説を加えておこう。イデアは idein (見る) という動詞から生まれた言葉で、プラトンはこの言葉によって、「魂の目」でしか見ることのできない、決して変化することのない物事の真の姿を指している。そしてわれわれの目の前にある全てのものはイデアの模像・似姿にすぎないと言う。人間には「魂の目」が備わっていて、その眼でしか見えない真の存在(=イデア)に近づくことを目指して生きることこそ正しい生き方だというのがプラトンの考え方であった(木田, 89-90)。

本研究の目的にとって重要なことを確認しておこう。一つは、超自然的原理としてのイデアが不変とされている点である。存在を静態的に捉える発想だと言えよう。いま一つは、イデアこそが本物の存在であり、われわれの目の前にある全てのものはイデアの模像に過ぎないとされている点である。これがずっと後に批判を浴びることになる。

2.3 第三層：キリスト教とその人格神

キリスト教はヨーロッパ社会において、陰に陽にあらゆる局面で実に大きな影響を及ぼし続けていることは否めまい。特に古代末期にギリシャ思想と結合することによって教義が形成されて以来、下記のように実に大きな根底要因となってきた。

まず紀元前3世紀から前2世紀にかけて、ユダヤ教の「聖書」のギリシャ語訳が作られている。その後、紀元1世紀頃、エジプトのユダヤ人思想家フィロンによってユダヤ教とプラトン哲学が結びつけられた³⁾。彼は世界制作者によって宇宙は作られたと説くプラトンの宇宙論の枠組みを使って「聖書」の「創世記」を解釈して見せた。紀元3世紀にはアレクサンドリアにいたプロティノスがプラトン哲学に神秘主義的色彩を加味してこれを改造する(=新プラトン主

義)。この新たなプラトン哲学を下敷きにしてキリスト教最初の壮大な教義体系がアウグスティヌス(354-430年)によって組織された。そして380年にはキリスト教がローマ帝国唯一の国教とされる(木田, 112-116)。

その後アウグスティヌスはキリスト教の護教論と教義論からなる大著「神の国」を書く。ここではプラトンの「二世界説」、すなわちイデア世界と、その模像である現実の世界があるとする説をベースとして「神の国」と「地の国」が説かれている。さらにプラトンの制作的存在論によって世界創造論を基礎づけ、キリスト教的人格神をイデアに替わる新たな超自然的原理として打ち立てた。このような内容から成るプラトン=アウグスティヌス主義的教義体系はやがてローマ・カトリック教会の正統教義として承認され、ヨーロッパにおいて13世紀頃まで社会に影響を及ぼし続けることになる(木田, 117-119)。

13世紀まではプラトン哲学が最高の権威とされたが、十字軍の運動などを契機としてアリストテレス哲学もヨーロッパ社会で知られるようになる。折しもローマ・カトリック教会の政治介入などで教会の腐敗墮落が顕著になり、教会は新しい教義体系の整備を迫られていた。このとき下敷きにされたのがアリストテレス哲学である。教義体系再編の仕事は12世紀から教会や修道院付属の学校(スコラ: schola)で行われたので、その考え方はスコラ哲学と呼ばれている。スコラ哲学の大成者がトマス・アクィナス(1225/26-1274年)で、アリストテレス=トマス主義による新たな教義が組織される。この新しい教義では神の国と地の国、教会と国家とが非連続ではなく連続的なものとして位置づけられた。そのため神聖な領域にあるべき教会や聖職者による世俗領域(政治)への介入は迫認され、教会や聖職者の腐敗墮落は改善されることはなかった(木田, 121-127)。

そこで14世紀あたりから信仰の浄化を図ろうとするプラトン＝アウグスティヌス主義復興の動きが起こってくる。17世紀に近代哲学の起点となったデカルト（1596－1650年）やパスカル（1623－1662年）などもこのプラトン＝アウグスティヌス主義復興の運動と接触しながらものごとを考え始めたと考えられている。デカルトによる二元論や、その一環としての新たな自然観にはこの復興運動が影響を及ぼしたと考えられる（木田，127－129）。古代末期（5世紀頃）以来、ヨーロッパにおいては学問分野でも信仰分野でも、教会と神学が支配的力を維持し続けたようだ。そのため人間は神によって創造された神の僕であるとする人間観が支配的であった。

2.4 第四層：理性主義の誕生と変遷

ここで言う理性主義とは、われわれ人間の理性には生得的な観念・機能が備わっているという考えである。これはプラトン以来の超自然的原理に人間理性が新たに加えられたことを意味する。原語は、英語でなら *rationalism* で、これが「合理主義」と訳されることもある。この主張は、自然の内に何が存在し、何が存在しないかを人間理性が決め、それが存在する一切のものの存在を支える「基体・実体」にされたことを意味する。言い換えれば、自己の存在の確実性を確信した人間理性が明確に認識できるものだけが「真に存在する」と認められるようになったのである（木田，159－161）。

このような主張を行った初期の代表的人物がデカルトである。彼はキリスト教の影響力がなお強かった状況下で、自分自身の理性・思惟による世界認識の信頼性を打ち出した。ただ彼の言う「理性」はまだ圧倒的に神的理性に依存したものであった。そのため人間理性が本当に「基体・実体」の役割を果たすためには神的理性の退場が必要である。これが実現されるためにはカントの登場まで約一世紀半待たねばなら

なかった（木田，160）。しかし不十分とはいえ、デカルトの主張は人間が神の僕の地位からの脱出を試みたものとして画期的であったと言えることができる。

3. 理性主義の変遷と発展（神的理性からの脱却／人間理性の自律性向上）

3.1 啓蒙主義運動

18世紀になると超自然的原理に立脚するキリスト教に距離を置く動きは明確になる。神的理性の後見を脱した批判的理性、言い換えると自立した人間理性でもって自然や社会を認識しようとする運動、すなわち啓蒙運動がそれである。ドイツでこれを代表するのはカントだとされているが、彼は「啓蒙」の概念を次のように定義している。「啓蒙とは人間がみずから招いた未成年状態を抜け出すことである。未成年とは他人の指導がなければ自分の理性を使うことができない状態である」。つまり、神的理性の後見を排して自立した人間理性が、これまで自分を支えてくれると思っていた宗教や、さらには形而上学までも迷蒙と断じて、その蒙（くらがり・無知）を啓き、それを批判する理性になることである。ベーコン等イギリスの知識人の下で始まった啓蒙の運動は、フランスではヴォルテール（1694－1778年）やディドロ（1713－1784年）のような無神論的、唯物論的思想家のもとで、より明確な「批判する理性」となっていく（木田，169－170）。

ただ、神的理性への依存から脱することには矛盾もあった。これまでは神的理性によって保証されていると信じているからこそ人間理性はその観念・機能を頼りに世界の存在構造についての確実な認識を手に入れることができると信じていることができた。しかし神的理性の媒介がなくなれば世界の存在構造を正確に認識できる保証が無くなる。そのため17世紀の理性主義的哲学は次第に独断論の色合いを濃くしていった

(木田, 170)。

3.2 イギリス経験主義

このような状況を踏まえて、イギリスの啓蒙思想から新たな動きが生まれる。従来の認識基盤となっていた「生得観念」や「理性的認識」の効力を否定し、われわれの認識は全て感覚的経験にもとづく経験的認識だとする主張である。理性的認識から経験的認識への転換である(木田, 171)。このような主張をしたのがロック(1632-1704年)やヒューム(1711-1776年)である。しかし経験的観念は経験をした人しかもっていない。そのため経験的認識のもつ真理性は蓋然的で相対的なものに留まることになる。彼らは数学や物理学の認識までも蓋然的なものに留まるとしてその確実性を否定したが、後にカントはこれに疑問を抱く(木田, 171)。

3.3 カントの試み

3.3.1 理性主義と経験主義双方の融合

理性主義と経験主義双方の上記のような有効性と限界に対する反省を踏まえてこれを乗り越えようとしたのがカントである。彼は神的理性の媒介が無くても、ある範囲内ではわれわれ人間の理性的認識も世界の合理的存在構造を捉えることができると主張した。われわれの純粹な理性、すなわち経験にいっさい頼らない理性による認識が有効に働く場面(幾何学、数論、理論物理学)と、その働きが全く無効になる場面(神学や形而上学)とを批判的に区別しようとしたのが彼の主著「純粹理性批判」(1781年)である(木田, 171, 185)。

理性主義に対しては、われわれ人間の理性が有限であること、したがってわれわれの認識する世界はこの有限の理性に合わせて作られたものだと考えた。他方、経験主義に対しては数学や理論物理学の認識の普遍性や客観的妥当性まで否定するのは行き過ぎで正しくないとした

(木田, 178-179)。

3.3.2 超自然的原理とされる人間理性

カントは人間理性の有効範囲を示すために認識対象を二つに区分している。「物自体の世界」と「現象の世界=自然界」である。前者はわれわれとは無関係にそれ自体で存在している世界である。したがってそこにはわれわれの認識能力は及ばない。これは要するに、神のみが認識できる世界と言うことができよう。他方後者は人間の有限な理性を通してわれわれに現れ現象している世界である(木田, 178-179)。要するに、現象界・自然界はそもそも有限な人間理性のキャパシティで捉えられたものに過ぎないから人間理性でも認識できるということであろう。

現象界・自然界は人間理性で認識しようということから、彼はこれを逆に見て「人間理性は自然界の形式構造の創造者」だと言う。すなわち人間理性はもはや神の後見がなくても自然界に何が存在しえて、何が存在しえないかを決定できるとしている。この表現からは人間理性が新たな超自然的原理に仕立て上げられていることが窺われる。実際こうした役割を果たす人間理性を彼は「超越論的主観性(transzendente Subjektivität)」と呼んでいる。これは存在者の一般的な形式構造よりももっと高次な形式的構造を形成する主観としての機能を意味する(木田, 180-181)。

3.3.3 カント哲学の到達点と未達領域

A) 到達点

1) カントは経験を伴わない純粹理性に対して厳しい自己批判を行い、その有限性を認めている。他方、経験主義に対しても、その蓋然性に関する行き過ぎを戒め両者の融合を試みている。このことは本研究の分析視角から判断すると、人的理性の自律性をデカルトよりも高く評価していることを意味するものと言えよう。

2) 人間理性から神的理性の後見を一段と退け、

限定付きとは言え人間理性を「自然界の形式構造の創造者」にまで押し上げている。そしてこれを「超越論的主観性」と呼んでいる。すなわち人間理性を形而上学的原理の域にまで引き上げているのだ（木田，180-181）。ここには人間理性の認識能力と自律性に対する自信が、カントにあっては相当に高まっていることが窺われる。そしてカントの並々ならぬ意気込みが感じられる。

ただ、筆者の見解だが、ここには少なからぬ論理の飛躍・無理があるのではなからうか。有限の人間理性で捉えた現象は、人間のキャパシティで認識可能なものだけ選抜した現象・自然である。その意味ではこれを人間理性による「創造」と言えなくはない。しかし現象は「人間理性に特有の形式に合わせて加工されている」（木田，178-179）とまで言い、しかもこれを「超越論的」と言い切るのには詭弁ではなからうか。一方で人間理性から神の後見を退けようとしながら、他方では人間理性をむりやり神の域に押し上げているとは言えないだろうか。

B) 未達領域

カントは人間理性の有限性を認め、認識対象を二つに区分している。人間理性による認識が可能な現象界＝自然界と、われわれとは無関係に存在していて我々の認識が及ばない物自体の世界である。また理論理性と実践理性という区分も残されていた。これはカントが実体論的・二元論的発想からは抜け出していなかったということでもあり、人間理性の自律性向上がまだ不十分であったことをも意味している。

3.4 ヘーゲルの試み

3.4.1 カント哲学の継承とドイツ観念論哲学の使命

カント哲学を継承・展開したのはフィヒテ（1796-1879）、シェリング（1775-1854）、ヘーゲル（1770-1831）らで、彼らの哲学は通常

「ドイツ観念論の哲学」と呼ばれる。これはソクラテス、プラトン、アリストテレスによって展開されたギリシャ古典時代の哲学に匹敵する、哲学のもう一つの黄金時代とみられている。

カント哲学の下で、人間理性は超自然的原理の自覚をもつに至った。しかしまだそこには有限性が立ちはだかっていた。カントの後継者たちにはその限界を打破し、人間理性をより自律性の高いものとする課題が与えられた。一切の真理を自己意識から構成するというドイツ観念論の目標である⁴⁾。これこそがドイツ観念論哲学が目指した使命だと言われている（木田，188-189）。

3.4.2 カントの未達領域の克服策

第一に、ヘーゲルはカントが言う人間理性の有限性の基本原因を、主観の側から発動される悟性の枠組み、つまりわれわれの思考形式の不十分さにあると考えた。思考形式は人間精神の働きであるから、これを柔軟に弾力的にすれば悟性の枠組みが拡大され、人間理性の及ぶ範囲も拡大すると考えたのである。より具体的には、思考の枠組みは単なる認識のための思考形式に留まらず、主観の活動一般、つまり宗教的・倫理的・政治的・社会的・芸術的活動などの活動全般の形式にまで拡大されたのである（木田，192-194）。

第二に、ヘーゲル哲学においては世界認識にも変化が見られる。世界はもはや単なる自然界ではなく、歴史的な世界として捉えられている。しかも世界史は人間にとっての自由拡大の道程としてとらえられている。これは世界が人間による意識的営み、形成のプロセスとしてとらえられていることを意味する。そこでは従来の同一・普遍的理性（ratio, Vernunft）が歴史的・個性的な精神（Geist）と言い換えられている。このような変化に応じて主観も、もはや個人的認識主観としてではなく、歴史的世界を形成していく民族精神として、さらには世界史を形成

する人類の精神として捉えられるようになって
いる（木田，194-195）。

3.4.3 超自然的思考様式の完成と問題

A) 完成

ヘーゲルは精神が世界に働きかけ、それを自分の分身に変えていき自由を獲得・拡大する能力をもつと考えている。そしてその能力はついには精神に立ち向かってくる異質な力がなくなる状況にまで達すると言う。これが絶対の自由を獲得した絶対精神である（木田，197）。

人間理性はカント哲学によって自然の科学的認識と技術的支配の可能性を約束された。しかしカントにおいてはそれはまだ一定限度内の現象界に限定されていた。しかしヘーゲル哲学によって世界全体の合理的形成の可能性を保証され、自然のおよび社会的世界に対する超越論的主観としての地位を手に入れたのである。言い換えれば、ヘーゲルはロゴス、理念、宇宙理念などと呼ばれる絶対精神を仮定し、世界はこの絶対精神が弁証法的図式に従って発展する姿に他ならないと考えたのである⁵⁾。

ヘーゲルは晩年に、「法哲学講義」の序文で「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」というテーゼを掲げた。これは、理性の認識しうるものだけが現実存在する権利をもち、したがって、現実存在する全てのものは理性的に認識可能であり合理的に改造されうるという意味である。近代ヨーロッパの文化形成を導いてきた理性主義はついに人間理性を超自然的原理の座に据えることによって、プラトン以来の超自然的思考様式を完成させたと言えるであろう（木田199-200）。

B) 問題

ヘーゲルによって超自然的原理にまで祭り上げられた人間理性の全能性が謳歌されていた頃、その背後ではそうした理性を原理にして形成され、巨大な技術文明に変身しようとしていた近代ヨーロッパ文化への反省が始まっていた（木

田，201）。なぜなら、そこにはデカルトによって提唱された二元論による自然観、すなわち自然を死せる物質、人間の支配対象とみなす自然観が継承されていたからだ。

この批判の中に、単なるヘーゲル哲学批判だけに終わらず、同時に近代理性主義の総体に対する批判にもなるような本格的なものがいくつかある。「意欲こそが根源的存在である」と主張した後期のシェリングや、自分の立場を「貫徹された自然主義すなわち人間主義」と呼んだ若きマルクスの思想がそうであった。そして彼らが理性主義批判の根拠に据えたのが、共に「生きた根源的自然」の概念だった。そうした生きた根源的自然の概念を抛り所に、近代批判を、いやそれどころか西洋という文化形成総体の批判をもっと壮大に企てたのがニーチェである（木田，202）。

4. ニーチェ思想の性格と彼の企て

4.1 19世紀末ヨーロッパ社会の諸相とニーチェの危機感

19世紀も半ばになるとニュートン力学を中軸とする科学的な自然観や世界観が広がりを見せつつあった。1851年にはロンドンで第一回万国博覧会が開かれ、産業革命の粋を集めた技術の成果が展示された。そして社会には自然科学的世界観の普及が見られた。しかし人々はこれらの成果に驚きを見せる一方で、科学と技術が全てを決定するらしい未来の姿を見て危機感も抱き始めていた。ちなみに、ニュートン物理学が前提にしていたのは絶対時間と絶対空間である。具体的には、空間は全て等質的な点の集合であり、また宇宙はすべて統一的な等質的時間に支配されているという前提である。ニーチェもこのような科学的な世界観に対して危機感を抱いたようだ。そしてここから本格的な思想形成を始めていった（木田，208-210）。

折しも19世紀半ばにはダーウィンの進化論が

公表され、ニーチェもダーウィニズムから決定的な刺戟を受けた。その理論によれば、生命は環境へ適応するために進化する。それならば環境へ適応するための生物学的機能に過ぎない人間の認識も相対的であり、絶対的な真理も、それをとらえる絶対的な知識や認識もあり得ないことになる。かくしてニーチェは相対的で動的なものの考え方を身につけるのである（木田 206-208）。

そもそもギリシャやローマの古典を原典で読んで研究する古典文献学を修めていたニーチェは古代ギリシャ以来の西洋哲学の伝統を十分熟知していた。彼が超自然的原理を媒介にして自然を見る思考様式に疑問を抱いたのは不思議ではない。ニーチェは以後これを批判して乗り越えようとするのである（木田、204）。

4.2 ニーチェの企て

4.2.1 ニヒリズム発生の原因究明

科学技術の成果が社会に普及していた19世紀の後半に、ヨーロッパの多くの人々は虚無的な思いを抱くようになっていた。ニヒリズムである。これはなぜ発生したのであろうか。ニーチェはプラトンの言うアイデアのような超自然的な最高の諸価値が人間の感性的世界に価値や意味を与える力を失ったからだと考えた。実は、それまで最高の諸価値と見なされてきたものはどこかに実在しているのではなく人間の手で設定されたものでしかないのに、それが誤って事物の上に投影され、「超感性的」原理と思い込まれるようになっていた。そのため人々は、ありもしない超感性的価値があると信じ、それを目指して営々と文化形成の努力を続けてきた。しかしついに、いくら努力してもこうした目標には到達できないという徒労に気づき、このような努力が逆に自分たちの感性的な「生」を抑圧していることを理解したのだ（木田、224-225）。感性的な世界の諸事物に価値と意味を与

えると信じられてきた「超自然的（形而上学的）」諸価値がその力を失ったことをニーチェは「神は死せり」と表現した。この場合、神とは超感性的な最高価値の象徴であるキリスト教の神を指す（木田、223）。

木田元によると、哲学にはニーチェの登場までとそれ以後には明らかな違いがある。登場するまでの思想が「哲学」であるのに対し、登場以降の思想は「反哲学」と表現するのが正しいと言う（木田、204-205）。したがって「神は死せり」という表現は神に対する人間の自律性の確立を明確に宣言したものとさえよう。

4.2.2 ニヒリズム克服の方策

ニーチェ最大の関心事は19世紀後半のニヒリズム、不毛な精神状況の克服であった。ニヒリズムを克服するためにはその原因を排除し新たな価値を設定しなければならない。具体的には、それまでの哲学（プラトニズム）を批判して、ニヒリズムの元凶である従来の最高価値を積極的に否定しなければならない。そして長い間哲学の論理によって「死せる物質」と見なされてきた自然観を転換し、古代ギリシャ早期の「生きた自然」概念の復権を実現する必要があるとニーチェは考えた（木田、226-229）。

4.3 「生きた自然」概念の復権：反哲学

4.3.1 初期の「自然」概念と復権の試み

ニーチェ（1844-1900）が活躍した頃のヨーロッパでは、古代ギリシャの文化はひたすら晴朗なもので、アポロンに代表されるオリュンポスの神々や、青い空を背景にくっきりと白く浮かび上がる神殿や彫刻に象徴されるような明るく晴れやかなものと考えられていた。ところがニーチェは、そうした明るいアポロ的な精神の根底に実は暗く厭世的なディオニュソス的な情念が潜んでいるのだと主張した。そしてこれら二つの要因が均衡を保って結合したときギリシャ文化は最高の完成を見たと考えていた。こ

うした古代ギリシャ文化観を共有する者は古代ギリシャ史家や法制史家の中にもいた。しかし当時のヨーロッパ史学界や古典文献学界ではこのような見解は非常識とされていたようだ（木田, 214-216）。

4.3.2 ニーチェの思想的環境：ドイツ形而上学の伝統

ニーチェは古代ギリシャ文化や古代ギリシャ悲劇の誕生を研究する際に上記の二つの原理を立てている。この二元論的発想は直接的にはショーペンハウアー（1788-1860）の「意志と表象としての世界」（1819年）の発想から得たようだ。ショーペンハウアーはその主張をカント哲学の解釈から得ており、さらにカント（1724-1804）の説はライブニッツ（1646-1716）の説から受け継がれたものであり、下表の通りである。この表から分かるとおり、ニーチェの見解も、その骨格はドイツ形而上学の伝統を継承したものと考えられる。

この伝統的ドイツ思想においては意志（Wille）や意欲（Wollen）はワイルドな生命衝動と言うべき内容を意味する言葉であるようだ。これらは弱肉強食という状況下で、ただ生きようとする生命衝動を意味するもので、どこに行くのか全くわからない無方向な生命衝動のようなものが考えられている。ドイツではこのような「生命衝動」の方が表象や認識のような「知的能力」よりも根源的だと考えられる伝統があったようだ（木田, 214）。

ドイツ形而上学の系譜（木田, 212-213）

	より根源的なもの	感覚的現象
ライブニッツ	意欲	表象
カント	物自体界の意志	現象界を形成する表象
ショーペンハウアー	意志としての世界	表象としての世界
ニーチェ	ディオニュソス的なもの	アポロンのなもの
ヘーゲル	人間の絶対精神	絶対精神が作るもの

4.3.3 ダーウィニズムの刺激を受けた「自然」概念の再考

ニーチェは最初はソクラテス以前の古代ギリシャの自然観、すなわち「おのずから生成するもの」を「ディオニュソス的なもの」と重ねていた。しかしこれら両者は、実際にはなかなか上手くはつながらない。そのためこれらの調停が課題となっていた（木田, 217-218）。

折しも1880年代に、ダーウィニズムの刺激を受けたニーチェは「生」の概念の再考を始める。全ての存在を相対的かつ動的な論理で考えるようになり、「生」の概念もこの論理で再考し始めたのだ。新たに設定された「生」の概念はもはや無方向な生命衝動ではなく、アポロンのなもの（＝知性）をも含み込み、「より強く、より大きくなろうとする方向性」を明確に帯びているディオニュソス的なものとされている。ニーチェはこれを「力への意志」と呼び、これをその後の思想の中心に据えることになる（木田, 217-219）。

4.3.4 「力への意志」という自然概念の意図

この新しい自然概念を思想の中心に据えた目的は、端的に言えばプラトニズムを根底から批判すること、言い換えれば反哲学の実現である（木田, 221）。なぜならニーチェが克服を企図したニヒリズムの根本原因がプラトニズムをベースとする「哲学」、すなわち超自然的（＝形而上学的）思想にあると考えたからである。プラトニズムは、実際には絶えず生成し変化している自然の実態を否定し、これをあたかも静止した不変のものであるかのごとく捏造したと断じたのである。その意味では、哲学で言われる「真理」とは、転変し生成しつつある事態の一つの局面を、「静止して存在すること」として持続しようとする思い込みに過ぎない（木田, 236-237）。そこでニーチェは生き生きとした躍動的な「生」を回復すべきだと考えてその作成に取りかかる。そのために、まず最高価値を

設定してきた価値定立の仕方，すなわち超自然学（形而上学）を本領とする哲学，キリスト教に代表される宗教，生を抑圧して禁欲を標榜するストア派以来の道徳などに対する批判を行ってプラトニズムの逆転を図ったのである。そして新しい価値定立の原理を提示したのである（木田，226－227）。

4.4 新たな価値定立の原理

4.4.1 必要条件

超自然的原理がことごとく否定された後は，新たな価値は生きた自然とも言うべき感性的世界の「生」，すなわち「力への意志」に求められる。それは「生成の内部での生の相対的持続」という複雑な機構に関わる確保と高揚の条件となる目安」と定義される（木田，234）。分かりやすく言えば，現在よりも大きく強くなろうと生成して，まずこれを維持し，ついでこれをより高い段階に高めることに価値を見いだすということであろう。要するに，実際には生成し転変し続けている自然をそのままに，動的・発展的にとらえることであろう（木田，228－229）。

4.4.2 新たな価値の維持と高揚

A) 価値の維持

価値定立の第一は，到達したものを確保し維持する段階であり，第二は生をいっそう高い可能性へ向けて高揚させる段階である。前者の働きが「認識」とされている。それは，実際には絶えず生成し変化している世界にあって，ある時点であたかもそれが静止しているかのように切り取ってみせる働きである。そして，そこで示される価値が「真理」と呼ばれている。他方後者は，「芸術」だとニーチェは言う（木田，239）。

B) 価値の高揚作用：芸術

「生」は現状維持で止まっているはその意義が制限されるので，あくまでも高揚を目指すことが重要である。われわれは真理を得たことで

満足し，現状に止まっているはだめになる。そうならないためには「芸術」が不可欠である。「芸術」という価値定立作用と，それによって定立される「美」という価値こそが「生」を刺戟し高揚させることができる。「芸術」は生をいっそう高い可能性へ高揚させるがゆえに，現状確保の機能である「認識」よりもいっそう重要である（木田，238－239）。

C) 肉体の復権：精神に対する肉体の優位

ニーチェによれば，芸術は肉体の所業である。彼はプラトンやデカルトが肉体から浄化された「精神」を手引きにして存在を説明した超自然的（＝形而上学的）な世界解釈を否定し，肉体を手引きとする新たな世界解釈を提唱しようとした。「力への意志」の哲学も，芸術によってもたらされる「美」による救済，すなわち芸術によるニヒリズム克服の企てだったと考えられる（木田，240－241）。

4.5 人間の自律性向上から見たニーチェ思想の意義

4.5.1 「反哲学」とその影響

ニーチェ思想の意義を端的に言えば，プラトニズムの否定，反哲学の提唱だと言えよう。超自然的価値によって世界の諸事物に意味や価値を与え，ヨーロッパの文化形成を導いてきた哲学を批判し，これの退場を迫ると共にキリスト教に代表される宗教やストア派以来の道徳をも批判することによって，実に長い間人間の感性的世界の生を抑圧していた体制の転換を企図したのである。

言い換えれば第一に，長い間「死せる物質」とされてきた自然に息を吹き込み，「生きておのずから生成する」自然概念を復権させたことであろう。第二には，人間の感性的世界の「生」を大きく評価し，ヨーロッパの人々をニヒリズムから救出しようとしたことであろう。そのための手段として，芸術（art）の効力を評価し

たことの意義も大きい。art は当時批判の対象となっていた科学 (science) の対極概念であり、人間の自律的で創造的な感性的営為を積極的に推奨するものだからである。ちなみに、art に属する経営学上の用語としては次のようなものが挙げられよう。熟練、技芸、暗黙知などである。

ニーチェが哲学界に与えた影響も小さくはない。ハイデガーをはじめとする20世紀前半の思想家達は、多少なりともニーチェの「哲学批判」つまり「反哲学」の影響下にものを考え始めたのであり、いわば西洋哲学の、さらにはそれを軸とする西洋の文化形成の脱中心化にとりかかっている。ちなみに、ハイデガーは自分の思想的営為を「哲学」とは呼ばず、「存在の回想」つまり、原初の存在の回想と呼んでいた。また20世紀後半には、反哲学の動きに刺激されてポストコロニアリズムのような「西洋」の脱中心化・解体の具体的作業への着手も見られる(木田, 247)。

4.5.2 「反哲学」の限界

ハイデガーの解説によると、ニーチェは結局のところ形而上学(超自然的思考)の継承者ではあっても、その克服者ではなかった。その理由は、彼が「存在」(ある)を「本質存在」(である)と「事実存在」(がある)に分けて考えているからである。確かにニーチェは自然を「生成するもの」と考えるソクラテス以前の思想家達に深い理解はもっていた。しかし、究極の存在概念の規定に際しては、西洋哲学が伝統的に真の始源だと見慣らわしてきた始源、つまりプラトンとアリストテレスの言う「存在=現前性」という存在概念にまでしか遡ることができなかった(木田, 245-246)。

5. ハイデガー思想の性格と彼の企て

5.1 思想形成と研究分野の変遷

木田元によれば、ハイデガーはやはり20世紀

最大の哲学者である。彼の思想形成の経過を見てみよう。彼は1889年にドイツ南部の小さな町のカトリック教会の堂守の子供として生まれた。そのため大学では神学部に入り、カトリック神学を学ぶことが思想形成のスタートになったようだ。ただ、高校生の時にブレンターノの書いたアリストテレスに関する著作を読んで「存在への問い」に興味は持っていた。そのためか大学入学後まもなく哲学部に転部し、多くの哲学作品を読み進めた。特にニーチェの「力への意志」(1910年)からは強い影響を受けていたようだ。したがって、哲学研究に関しては初期の段階ですでにアリストテレスとニーチェの影響を受けていたと言えよう。1916年、26歳の時に、現象学の提唱者であるフッサールと出会って現象学を学ぶが、この分野への関心は長くは続かなかったようだ(木田, 254-256)。

その後、1917年頃、大学の人事問題も影響したらしく、プロテスタント神学へ鞍替えしている。しかしいずれにしても、この時代のハイデガーの関心は神学に集中していたようだ。1923年には、アリストテレスの思想に関する研究報告書、いわゆる「ナトルプ報告」を書いている。この報告書の主旨は、アリストテレスにおいては「存在する」ということは「制作されてある」ということを意味するというものである。その後再び大学人事の話が持ち上がった際に、彼は今度は「神学から形而上学へ」という旗印を掲げている。そしてこの旗印の下に書かれたのが主著の「存在と時間」(1927年)である(木田, 259-266)。この時期、ハイデガーは〈存在への問い〉に強い関心を抱いていたようで、1928年~1929年の間に形而上学の解明を意図した著作を立て続けに3作出版している。「形而上学とは何か」、「カントと形而上学の問題」、「根拠の本質について」である⁶⁾。ただ前に刊行された「存在と時間」は全体構想(次節で示す)の一部に過ぎず、中核部分は未完であった。これ

を補う位置にあるのが1935年の講義録「形而上学入門」である⁷⁾。

1935年頃はハイデガー思想を前期と後期に分ける境界線に当たる時期になっているようだ。これ以降、形而上学に対する批判的姿勢が明確になっている。形而上学は「存在者」に即して「存在」を問うに過ぎないというのがその理由である⁸⁾。1945年にサルトルは実存主義の旗揚げをした際に、ハイデガーを実存主義の先駆者の一人として挙げている。これに対する応えのような形で書かれたのが「ヒューマニズムについて」(1947年)である。この中でハイデガーは、自分の思想は実存主義でもないし、ヒューマニズムでもない。むしろ人間中心主義であるヒューマニズムを批判し、そのヒューマニズムの根幹をなす超自然的(形而上学的)思考の克服をはかる反ヒューマニズムだと言っている(木田, 288-289)。形而上学からの脱出という課題と格闘していたものと考えられる⁹⁾。

念のために付言するが、ヒューマニズムに関するこの主張は、専門家を除いて日本社会では理解されにくい可能性があると考えるので、「5.3」で再度取り上げる。

5.2 「存在と時間」に込められた意図

5.2.1 「存在と時間」の構想と目的

ハイデガーはこの主著において、「存在一般の意味の究明」、「存在の根本問題」に取り組もうとしている。具体的に言えば、その目的は上記のナトルブ報告の結論を膨らまし、アリストテレス以来、西洋の伝統的存在論においては「ある」ということを何かによって「作られてある」と見る同一の存在概念が一貫して受け継がれていることを明らかにし、これを批判的に乗り越えることであった。彼の意図を明確にするために、予定されていた「存在と時間」全体の構成を見てみよう。下記のようにになっている(木田, 266-268)。

第一部：現存在を時間性へ向けて解釈し、時間を存在への問いの超越論的場として究明する

第一篇：現存在の準備的な基礎分析

第二篇：現存在と時間性

第三篇：存在と時間

第二部：テンポラリテートの問題群を手引きとして存在論の歴史を現象学的に解体することの概要を示す

第一篇：カント

第二篇：デカルトから中世存在論へ

第三篇：アリストテレスと古代存在論

1927年に公刊されたのはこれらの内の第一部第一篇と第二篇のみである。全体の中核部分はもちろん第一部第三篇「存在と時間」であろう。その意味では公刊部分は中核部分のための準備的考察になると言うことができよう。第二部は文字通り存在論の歴史的考察である。この構想からは次のような目的が推察できる。一つにはアリストテレス以来、西洋の伝統的存在論においては、〈ある〉ということ〈作られてある〉とみる存在観が一貫して受け継がれていることの確認であろう。ソクラテス、プラトン、アリストテレスの下で始まった「哲学」は、確かにその後約2千年の間に多様に変化はした。しかしアリストテレスからニーチェに至るまで、その変化を超えて、またその変化を貫いて、中核的な部分では同じものであり続けてきたとハイデガーは考えていたようだ(木田, 282)。いま一つは、このような伝統的な存在観を、ソクラテス以前の思想家たちの存在観、すなわち〈ある〉ということ〈生成〉とみなす存在観と比較し、これを批判して破壊的に再構成することである(木田, 266-267)。

この構想を、若干表現を変えて整理すると下記の三つの部分に書き換えることができる。

①時間を判断基準とする「現存在」(=人間)の分析：(第一部第一、二篇)

②存在一般の意味の解明：（第一部第三篇）

③存在論の歴史的考察（古代から近代へ）：
（第二部第一、二、三篇）

①では、人間と時間との関わり方の違いが存在観に影響を及ぼすことが分析されている。②は中核部分であり、ここでは現存在を含む存在一般の意味を、人間存在の構造分析を通じて、時間の視角から決定することが予定されていた¹⁰⁾。③ではアリストテレス以来の存在論の歴史分析が予定されていた（木田、268-270）。

5.2.2 存在観再構成の方法

ハイデガーはどのような手順でヨーロッパの伝統的存在観の再構成を図ったのであろうか。端的に言えば、第一は伝統的な存在観を形成してきた超自然的（＝形而上学的）方法、すなわち哲学の批判である。哲学は存在をひたすら〈それは何であるか〉と問う。このように問うとき、問う者は問いかけられる存在者全体から分離され、外の特権的位置に身を据えている。言い換えると、人間中心的な見方をしている、人間と存在との始原の調和は破られている。その時、人間は全存在の一部としてそこに包み込まれてはおらず、それと調和して生きるものでもなくなっている（木田、286）。人間が自らを超自然的価値に祭りあげているのだ。

第二は、存在そのものの意味を問う際に、ハイデガーは「時間」が密接に関係していると考えたようだ¹¹⁾。存在するということを「作られてある」と解するか「成り出でてある」と解するかの違いは、現存在（＝人間）が未来や過去とどう関わり合うか、たとえば流れに任せるように生きるか、それとも積極的に立ち向かって行くような生きかたをするかということと密接に関連していると考えた（木田、269-270）。だから主著「存在と時間」の第一部第一篇と第二篇は中核部分（第三篇）の準備部分とされるのであろう。

第三点として、ハイデガーの考える人間の

「存在の真理」を確認しておこう。彼によれば、人間の本質は存在によって語りかけられ、要求され、「存在へと身を開き、そこへ出で立つあり方」にある¹²⁾。言い換えれば人間と存在との始原の調和状態である。そしてそこでは人間は存在の主人ではなく牧人となるべきであると言う¹³⁾。なぜなら牧人は人間と存在との調和を守るが、主人は存在から離れ、それを支配するものとなるからである¹⁴⁾。

5.2.3 ハイデガーの深遠な目的

上記のとおり、ハイデガーの表面上の意図は、まず形而上学的方法による伝統的存在論の存在概念が存在を「制作されてあるもの」とみる存在了解に基づくものであることを確認し、さらにそれを古代ギリシャ早期の「存在＝生成」と見る存在概念と対比して相対化し、批判的に乗り越えることであったと考えられる。

しかしハイデガーの目的はここに留まらず、より深遠なものではなかったかと考えられる。そこにはニーチェの思想と企てを承継して生かそうとする意図が見て取れるからである。具体的に言えば、ハイデガーの目的はヨーロッパの文化革命まで意図した壮大なものだったのではなかろうか（木田、273-275）。彼は1955年にフランスの小さな町で、「それは何であるかー哲学とは？」というテーマで講演を行い、次のように言っている。哲学という言葉はギリシャにしか生まれなかった。だから哲学こそがギリシャ精神のあり方を規定するものである。この哲学の特殊な知のあり方は西洋＝ヨーロッパに受け継がれ、西洋＝ヨーロッパの歴史の最も内奥の根本動向をも規定するものとなった。その結果、西洋＝ヨーロッパだけがその歴史の最も内奥の歩みにおいて根源的に哲学的なのだ。

ハイデガーはさらに一歩踏み込んで次のように言う。西洋＝ヨーロッパの歴史の「哲学的」歩みは諸科学を生み出した。近代ヨーロッパにおける科学知や科学技術の成立も「哲学」と呼

ばれる特殊な知を形成原理にしてきた西洋＝ヨーロッパ文化の必然的帰結である。しかし存在を「作られてあるもの」とみる哲学の思想では、存在するもの・自然は制作のための無機的な材料、死せる物質とみなされる。こうした自然観の上に築かれた「西洋」の文化形成・近代科学技術文明の先行きにハイデガーは絶望した。そのため、このような存在概念を転換することによって西洋における文化形成の方向を大きく転換しようと企てたのであろう（木田、274－280）。この思想はニーチェと同様に「反哲学」という論理を基礎にするものと見るができる。

5.3 反哲学と反ヒューマニズム

5.3.1 ヒューマニズムの真の意味と哲学の方法

ハイデガーの思想を理解するためには彼が言う「反ヒューマニズム」の意味を正しく理解しておくことが不可欠である。日本で日常、ヒューマニズムという語が用いられる時、それは「人間的なことを尊重する思想」（広辞苑）、あるいはもっと素朴に言えば、人間を大切に思う思想としてプラスのニュアンスを込めて理解される場合が多いようだ。しかしハイデガーの言う「人間的なこと」の意味はこれとは多分に異なっている。

ハイデガーは人間性を「存在への近さ」にもとづいて思索している。彼が何度も繰り返し用いている表現で言えば、「存在へと身を開き、そこへ出で立つあり方」である。さらに言い換えれば、存在に身をゆだね、存在そのものに規定されつつ、その内に故郷をもつに至る次元のことである。ここで言う「故郷をもつ」とは存在と同列の位置で、存在に近い状態にあることである¹⁵⁾。このようなあり方が実現されたとき、そこには存在との始原的調和が実現される。ハイデガーはこのような状態をあるべき人間性と

考え、したがってこれを求め大切にすることをヒューマニズムと言っている¹⁶⁾。

ところがハイデガーによれば、近代人は存在から離れ、見捨てられ、故郷を喪失していると言う¹⁷⁾。そして人間をこのような状況に至らしめたのが形而上学的思考方法すなわち哲学だと考えている。哲学では全存在を対象として「それは何か」が問われる。全存在の本質を問うのであるが、問うためには、問う者（人間）は存在から離れて対象を見る。そこでは人間は全存在に対して優越的な位置、特権的位置に居る。あまつさえ人間は全存在を制作のための死せる対象や材料とみなしている。そのためここにはすでに「存在との始原の調和」はない。これは言わば人間利己主義であって、本来あるべき人間性を重視したものではない。したがって哲学の視座で言うヒューマニズムは真に人間性を大切に思う思想ではなく、存在との調和を破壊する尊大な思想となっているとハイデガーは考えている。これが哲学的方法に異を唱え、反ヒューマニズムを主張する理由である。

5.3.2 ヨーロッパにおけるヒューマニズムの伝統的概念

ヨーロッパでヒューマニズムと言われる場合、当然「人間性」が問題とされてきたのであるが、その意味をハイデガーの挙げる事例に沿って歴史的に見てみると概ね次のようになっている。まずキリスト教においては、人間は救済史的に「神の子」であり、他の被造物より上位に位置づけられている。創造されたときから特権的な地位に置かれているのだ。またこの俗世は神の国に至るためのかりそめの通路に過ぎないため、そこでの人間性は必然的に神性を帯びたものである。

次にローマにおいては、「人間らしい人間」とは後期ギリシャの教養を身につけて有徳性を高めた高貴な人間を意味する。具体的にはローマ人を指す。この語の裏にはローマ人以外を

「野蛮な人間」として対置・蔑視する人間観がある。いや当時、被征服者は人間扱いされなかったのではないかと考えられている。

第三に、14～15世紀イタリアにおけるルネサンス期には、人間性はローマ人的特性の再生、言い換えるとギリシャ精神の再活性化を意味していた。歴史的にこのような変遷はあるものの、どのヒューマニズムもみな形而上学（＝哲学）に基づいている¹⁸⁾。

さらに歴史を下ってマルクスにおいては、古代への帰還は問題にされないが、歴史的なものの本質が存在のうちに認識されている。彼の言う「人間の疎外」とは近代の人間の故郷喪失である。全ての労働者が労働の素材として現れてくるという指摘である¹⁹⁾。

これらの歴史的事実を踏まえていたであろうハイデガーの「反ヒューマニズム」思想は「反哲学」思想と対をなすものである。したがって「反ヒューマニズム」も人間的なものの擁護に反対したのではなく、逆に、ヨーロッパに伝統的な形而上学的ヒューマニズムへの反省を踏まえて新たな展望を開こうとしたものと言えよう²⁰⁾。

6. 総括：人間の自律性の高まりとそれに対する反省

最後に、本研究で確認したことの要点をまとめておこう。

ヨーロッパ思想は近・現代のものでもその源流は古代ギリシャに端を発している。中でも特にプラトンの主張を継承する形式で超自然的な実体・原理を措定し、これを根源的要因として現象界を説明する方法が主流をなしてきた。この方法がヨーロッパに固有のいわゆる「哲学」である。今日のヨーロッパ思想の成り立ちは第二章で記述したとおり四つの層で形成されていると言いうことができる。

17世紀にデカルトによって新たな超自然的原

理が打ち出された。精神・理性である。以後この理性によって現象界を説明する諸説（＝理性主義の諸説）が唱えられるが、本稿では18世紀の啓蒙主義運動以降の主要人物であるカントとヘーゲルの説をまず取り上げ、理性主義の発展・変遷の中に人間の自律性がいかに成長したかを探ってみた。後半では反哲学的性格をもつと言われるニーチェとハイデガーの説を考察した。彼らの主張の要点は概ね下記のようにまとめることができよう。

1) カント説について

17世紀にデカルトが、現象を認識する能力として人間の精神・理性の有効性を唱えたのは画期的であった。しかしその人間理性はまだ全面的に神的理性に依存したものであった。そのため、デカルトは人間理性の万能性を唱えたものの、それは神的理性の万能性のゆえであった。

その後、カントを含む多くの思想家達が神的理性の後見を脱する試みを行った。啓蒙主義運動もその一つである。この運動は理性の光によって人間の蒙（暗がり）を照らし出そうというものであるが、ここで言われる理性はデカルトの時代の古典的理性に対して批判的理性と言われる。神的理性の後見を部分的に脱した理性という意味である。また、人間の認識は全て経験に基づくものとする経験主義の主張も登場する。

理性主義の主張と経験主義の主張の論理的統合を試みたのがカントである。彼は基本的には理性主義のスタンスで考察を行ったが、経験に基づかない理性、すなわち純粋理性の有効性を批判的に検討し、その万能性を否定して有効性を部分的なものとした。一方で人間理性の有効性も認め、しかもそれは超自然的原理たり得ると主張して、これを超越論的主観性と呼んだ。その根拠は次のとおりである。われわれの認識している世界（＝現象界、自然界）は有限の人間理性を通して現れる。したがって、見方を変

えると、世界は人間理性に合わせて作られていると考えることができる。そうだとすれば人間理性は自然界の形成構造の創造者だとも言える。この論理によってカントは人間理性を超自然的原理たり得るものだと考えた。カントによって人間の自律性が一段高められたと言うことができよう。

2) ヘーゲル説について

ヘーゲルは人間理性の支配が及ぶ範囲の拡大を試みたと考えられる。彼は現象界を自然的な世界としてではなく歴史的な世界と捉える。しかも歴史的な世界は人間にとって自由を拡大する道程であると言う。となれば、そこで問題となるのは社会構造や国家機構などであり、これらは全て人間が作ったものである。すなわち全てを人間の主観性・意欲の中に取り込んだのである²¹⁾。ここに人間理性は絶対的自由を獲得した絶対精神と呼ばれるようになり、これによる合理的社会形成まで主張されるようになる。カントにあってはまだ有限とされた人間理性もついに世界を形成する超越論的主観すなわち世界の創造を行う原理にまで高められるのである。カントによって試みられた人間理性の評価はヘーゲルによっていっそう高められ、ここに理性主義的哲学はひとまず完成を見たと言えるであろう。

人間の自律性という視角からヘーゲルの主張を見てみるとどうであろうか。彼は人間理性をついに神と同列の位置にまで引き上げたとも考えられる。その意味ではこの上ない所まで人間の自律性を高めたと言えよう。しかしこの自律性は、より広い視野で見ると単純に賞讃されるべきものではないように思われる。なぜなら、人間理性を「意欲」と言い換えたヘーゲルは現実存在するものは全て意欲によって改造するという認識をもつまでに至っていたからである。あまりにも人間の尊大さが露呈してしまったとは言えないだろうか。後にニーチェが反哲

学を唱える状況が拡大していたのである。

ちなみに、ヘーゲルにはプロイセン国家の御用学者という面が厳然としてあったとも言われている²²⁾。

3) ニーチェ説について

ニーチェは反哲学を唱えたが、その理由は端的に言えば、プラトン以来の哲学的自然観すなわち超自然的原理を設定して自然を説明する思想が、自然を死せる材料におとしめ、結果的には人間の生き生きとした「生」の活力を失わせたと考えたからである。19世紀後半のヨーロッパでは科学主義、実証主義が支配的となっており、近代技術文明が華やかさを誇っていた。しかしそれは科学的に実証できるもの以外は何も信じられないという思想の蔓延をも意味する。そのためこの思想に対する反省や反逆も生まれていた²³⁾。そこで彼は超自然的原理を否定して、すなわち「神」を死に至らしめ、これに替えて感性的で創造的な、生き生きとした「生」の回復を試みた。カントは神を部分的に否定したに過ぎないが、ニーチェは全面的にこれを行ったと言えよう。

「力への意志」という自然観を唱えたが、これは人間の精神の絶対性・全能性を主張したヘーゲルの主張とは全く異なる。ニーチェにあっては意志はもはや超自然的原理ではなく、生きた自然の、いっそうの高揚を目指す活動の発露である。それは具体的には、肉体の活動をベースとする感性的な活動、すなわち芸術によって実現される。ヘーゲルの言う精神が超自然的な原理の域にまで押し上げられたのに対し、ニーチェの言う意志は、人間の感性的で創造的な営為を促進する力だと言えよう。したがって、彼の主張は人間の生の感性を柱とする自律性を強く推し進めた説と言えよう。

4) ハイデッガー説について

ハイデッガーはニーチェから強い影響を受けたようで、その説はニーチェと同様に反哲学的

なスタンスで唱えられている。彼も哲学・形而上学からの脱出という課題と格闘していたようだ。彼の説の要点としては下記の内容を指摘することができる。

まず、彼の考えている人間の本質は、存在によって語りかけられ、要求され、「存在へと身を開き、そこへ出で立つあり方」にある。人間は存在の主人ではなく牧人、すなわち存在の真理を守るものとなるべきである。人間が存在の牧人となると、そこには存在との始原的調和が実現される。

ハイデッガーが反哲学的な説を唱える理由は、哲学的な方法で思索するとき上記の始原的調和が壊れるからである。なぜなら哲学では全存在者を対象にして「それは何か」を問うが、その時、問う者（人間）は存在から離れ、しかも存在に対して特権的な位置にいる。このような人間の尊大な営みは結局、人間から故郷を喪失させるため、彼の考える、あるべき人間性に反するのだ。これが「反ヒューマニズム」を唱える理由である。

彼はヨーロッパに固有で伝統的な哲学的方法が打ち出した自然観と、これをベースとする科学技術文明が人間性を否定することに心を痛め、この転換を図ろうとする。その時、人間を分析する原理として彼が着目したのが時間であったようだ。人間が未来や過去とどう関わり合うかということは、存在を「作られてあるもの」と解するか、あるいは「成り出でてあるもの」と解するかという違いに密接に関連していると考えたようだ。

あ と が き

近・現代ヨーロッパ思想の本流を担うとも言うべき四人の思想を中心に超自然的原理に対する人間の自律性という視角から考察してみた。これらの諸説は、元より経営学説と直接の関連性をもつものではない。したがって経営学

の根底思想の、いわば先祖として取り上げたものだ。しかし先祖に遡ることには一定の意味があると改めて気づかされた。近・現代ヨーロッパ思想のほんの一部を紐解いたくらいの筆者の管見で大それたことを言うつもりは毛頭ないが、今後は欧米の思想や経営学説に対してより冷静に対応できると思われる。筆者自身は欧米の諸物に対するナイーブな憧れから脱しているつもりだが、研究に携わるものの一人として、今後はいっそう客観的証拠に基づいた研究を行うように心がけたい。

ちなみに、われわれが日常よく用いる「本質と現象」という論法について一言添えておきたい。この論法は哲学的発想から出て来たものと改めて気づかされた。そしてこれを用いる際にはよほど気を付けなければならないと思う。なぜなら「本質」という語の前には「不変の」という言葉が暗黙の前提として添えられているからだ。「不変の本質」などこの世界に本当に存在するのだろうかと思問に思う。

さて、今後の課題であるが、もう少し近・現代ヨーロッパ思想の研究を行い、これをベースとして米国の経営学の根底思想を研究したいと考えている。本稿は経営学の根本思想を捉えるためにはまだその入り口に過ぎない。企業家達の語った思想も取り上げなければなるまい。今日の欧米、特に米国社会にある強い宗教性や、経営に見られる強い実践意識、私的利益の飽くなき追求意識はどのようにして形成されたのかなど、疑問は尽きない。

注

- 1) 筆者はコーポレート・ガバナンスの研究においてこのことを痛切に思い、再確認した（拙著「持続的成長のためのコーポレート・ガバナンス—株式会社設計思想からの考察—、広島経済大学出版会、平成27年参照）。
- 2) 拙稿「科学的研究方法に潜む思考傾向」広島経済大学経済研究論集、第39巻第3・4号、2016年12月参照。
- 3) 紀元前500年頃ユダヤ教が生まれ、これをベー

- スにして紀元後キリスト教が誕生する。その後、500年頃、キリスト教が東方の文化と融合してイスラム教が誕生する。
- 4) ハンス＝ゲオルク・ガダマー著、本間 謙，座小田豊記『科学の時代における理性』法政大学出版会，1988年，16頁。
 - 5) 『哲学事典』平凡社，1982年，440頁。
 - 6) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳『「ヒューマニズム」について』，筑摩書房，1997年，339頁。
 - 7) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，335頁。
 - 8) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，340頁。人間が存在から離れて，これを観察の対象とすると，それを「存在者」と呼んでいるようだ。
 - 9) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，347頁。
 - 10) ハイデガー著、桑木務訳『存在と時間（上）』，岩波書店，昭和45年，「訳者の言葉」参照。
 - 11) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，349－350頁および木田 元，270頁。
 - 12) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，40頁。
 - 13) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，84頁。
 - 14) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，271頁。
 - 15) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，75頁。
 - 16) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，86－94頁。
 - 17) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，75－78頁。
 - 18) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，31－35頁。
 - 19) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，31－35，80－84頁。
 - 20) マルティン・ハイデッガー著、渡邊二郎訳，前掲書，101頁。
 - 21) 生松敬三，木田 元『現代哲学の岐路』講談社，1996年，90－92頁。
 - 22) 生松敬三，木田 元，前掲書，50頁。
 - 23) 生松敬三，木田 元，前掲書，46－58，154頁。

参 考 文 献

- A) 哲学史について
 - 1) 木田 元著『反哲学史』講談社学術文庫，2000年。
 - 2) 木田 元著『わたしの哲学入門』新書館，2014年。
- B) ニーチェや現代哲学について
 - 3) 木田 元著『マッハとニーチェ』新書館，2002年。
 - 4) 木田 元著『現代の哲学』講談社学術文庫，1991年。
 - 5) 生松敬三，木田元著『現代哲学の岐路：理性の運命』講談社学術文庫，1996年。
- C) ハイデッガーについて
 - 6) 木田 元著『ハイデガー』岩波現代文庫，2001年。
 - 7) 木田 元著『ハイデガーの思想』岩波新書，1993年。
 - 8) 木田 元著『ハイデガー「存在と時間」の構築』岩波現代文庫，2000年。
 - 9) 木田 元著『哲学と反哲学』岩波現代文庫，2004年。